

## 55 「看護」という言葉の使用のはじめ

(第一報) —看護という言葉はいつから使われるようになったか—

平尾 真智子

「看病」、「介抱」ではなく、「看護」という言葉はいつ頃から使われるようになったのだろうか。石原明らの『看護史』では仏教の用語として使われたこと、明治初期には nursing の訳語として「看病」が使われたと書かれている。看護史研究会の『看護学生のための日本看護史』には明治九年に東京医学校に看護婦が採用されたことが載っている。明治十年の太田雄寧著の『看護心得』には書名に看護という言葉が使われている。一方、国語辞典では明治十四年の「ことばのはやし」にはまだ看護という言葉はなく、看病という言葉が採録されている。明治二十二年の『言海』には看護という言葉があり、明治二十五年の『日本大辞典』には看護、看護婦という言葉が収録されている。このことからこれまでの記録では明治九

年が最初であることがわかるが、それ以前の使用例はないのか探索したところ、いくつかの事実を知ることができた。

仏教の用語として「看護」という言葉があるのか代表的な仏教辞典を調べてみたところ、中村元の『仏教語大辞典』にはなく、また『望月仏教大辞典』には看病という言葉が載っているのみであった。仏教の経典については『国訳一切経』の総索引には看病、看病人という項目があるが「看護」という項目はない。『国訳一切経』の漢文原典である漢訳仏典『大正新修大藏経』では「看病」という原語が使われている。しかし、大日方大乘『仏教看護学』（昭和四十四年）には「看護」という言葉が仏教経典を引用して用いられており、その出典は「南伝大藏経」となっている。「南伝大藏経」はパーリ語から和訳されたもので、昭和十年より刊行されている。仏教関係の書である『正法眼蔵随聞記』は鎌倉時代の道元の弟子の懐契の編集によるものであるが、その第五に「看病外護」（かんばんようげこ）という言葉がでてくる。

諸橋轍次の『大漢和辞典』の看護の項目には、出典と

して頼山陽『日本外史』があげられている。頼山陽（一七八〇—一八三二）は江戸時代後期の漢学者で、史学の著作として『日本外史』、『日本政記』がある。このうちの『日本外史』はその対象を頼山陽の生きた武家時代にとり、平氏から徳川氏にいたるまでを述べた漢文体の通史であるが、その巻之十七徳川氏前記豊臣氏下に「秀頼患痘福島正則自安芸馳至日夜看護」という一文があり、「看護」の記述がある。

『陸軍病院扶卒須知』は明治八年に陸軍が看護要員全般用に作成したもので、日本にとつてもっとも先駆的な看護教科書であり、教育に使用された。この本の原本はオランダの軍医ファン・ジュエル、ファン・エセル氏の共著で軍医の堀内利国らによって翻訳されている。その内容は解剖学、衛生学、外科学、包帯学、救急諸病、中毒証、死者となっているが、そのなかの序文と衛生学のところに「看護」という言葉が使用されている。

看護という言葉がいつごろから使用されたのかについて考察した。その結果看護という言葉は仏教用語であるとされてきたにもかかわらず、漢訳仏教経典では「看病」

という用語が一般的であることがわかった。鎌倉時代の仏教書には「看病外護」という言葉が使われており、江戸時代後期の漢学者による日本史の著作には明らかに「看護」という言葉が使用されている。明治になってからの「看護」の使用は陸軍軍医によるオランダ語原書の翻訳書に登場していることが明らかとなった。

なお仏教関係の書で『看護知事名籍』という書籍があるとされているので、今後探索していきたい。

（山梨県立看護短期大学）